

「もっと信用してくれ」コロナ禍のカンファで怒った理由 - 山下弘幸・やました甲状腺病院長に聞く◆Vol.3

「優等生ではないからこそ」歩いて来られた道のり

インタビュー 2021年9月4日(土)配信 聞き手・まとめ:小川洋輔(m3.com編集部)

病院開設から3年、コロナ禍を迎えた。先が見えない中でも、職員や患者の安心感を大切にしてきた。自らを「優等生ではない」と語る山下氏の矜持とは。

◆Vol.1「岩盤規制」乗り越え専門病院開設

◆Vol.2医師も看護師も残業ゼロ、よい人材が集まる病院に



やました甲状腺病院

——甲状腺の専門病院を経営していて、新型コロナウイルス感染症の影響はありますか。

遠方から来る患者も多いので、最初は受診抑制の影響が大きかったのですが、今は手術が少ない程度で外来患者数はコロナ前とほとんど変わりません。

——どのようにして患者が戻ってきたのでしょうか。

患者が安心して受診できるように努力をした結果だと思います。3密を避けるよう言われていましたから、院内のベッドや椅子などの配置を見直しました。そして、換気や消毒などの感染対策を徹底させました。

加えて、状態が落ち着いている方には検査結果にコメントを加えて郵送することにしました。現在、受診患者の7割くらいには検査結果を郵送しています。郵送料も手間もかかりますが、それが患者の安心につながる。採血をすればほしい1時間は待たなくてはいけないのですが、その方々がすぐに帰ることができるので、その分混雑は緩和されます。おそらくコロナ後も人が密集するのは嫌がる患者がほとんどだと思います。経営者としては待合室がガランとしているのは不安になったのですが、今は逆に密になると不安になります。コロナ禍でいろんなことを考えさせられ、発想が変わりました。

——もともと混雑していて喜ぶのは経営者側だけだったかもしれません。

その通りです。もともとは病院を受診すると待たされるものだと思われていたのですが、今思うと理想ではありませんでした。コロナ禍で戻って来てもらうには患者に安心感を持たせることが必要です。

——送料は病院が負担するのですか。

もちろんそうです。こちらの都合で郵送するわけですから患者に請求はできません。小さい利益にこだわるより

も、また次も来てもらう方が大事。短期的にはマイナスでも長期的には利益につながります。それは小さい病院だから院長の判断でできるんです。逆に私が判断を誤ったら大変です。

——**新型コロナの感染者は出たのでしょうか。**

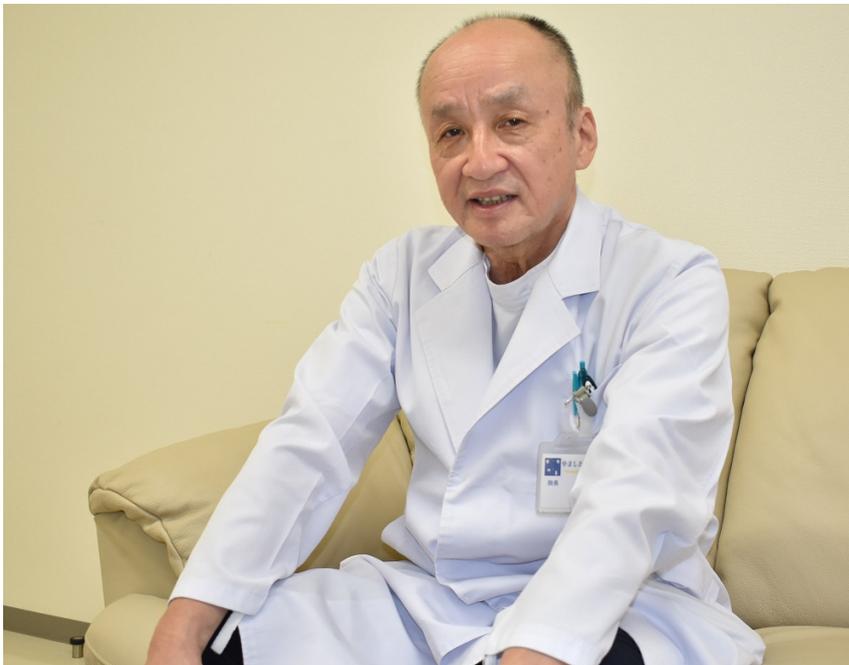
院内で感染は起こっていません。幸い、入院患者の陽性もありませんが、偽陰性の可能性もありますから、クラスターが発生しないよう細心の注意を払っています。パート職員の家庭内感染はありましたが、それは仕方がないことです。

——**職員の待遇も維持できましたか。**

実は、1回目の緊急事態宣言の時、職員の勤務時間を1時間ずつ減らしました。患者も減っていたし、通勤時間を少しでも混雑時間帯からずらす必要があると考えたからです。それでも給与もボーナスも一切変えていません。

ところが、職員の間では当初、勤務が1時間短縮されたから、その分給与が減らされるのではないかと心配していたようです。それを聞いてびっくりして、カンファレンスで怒ってしまいました。「そんなことはあり得ない。時短にして給与削減するなら事前に説明するに決まっている。もっと信用してくれ」と。ただし、この件で私にとっては当然なことでも職員には丁寧に説明すべきであったと反省しています。

当時は受診抑制による経営へのダメージはあり、この先どうなるのか分からず不安もありましたが、職員には生活があります。小さいことをやっていたら何事もうまくいかないというのが私の考えです。コロナで勝手に勤務時間も給与も減らされたと思われると、後々響きますよ。病院を継続させていくために目先の利益ばかりにとらわれてはいけません。



著書への思いを語る山下院長

——**本書の中では、父親の急逝、大学中退、医学部入試への挑戦と、先生の生い立ちにも触れています。**

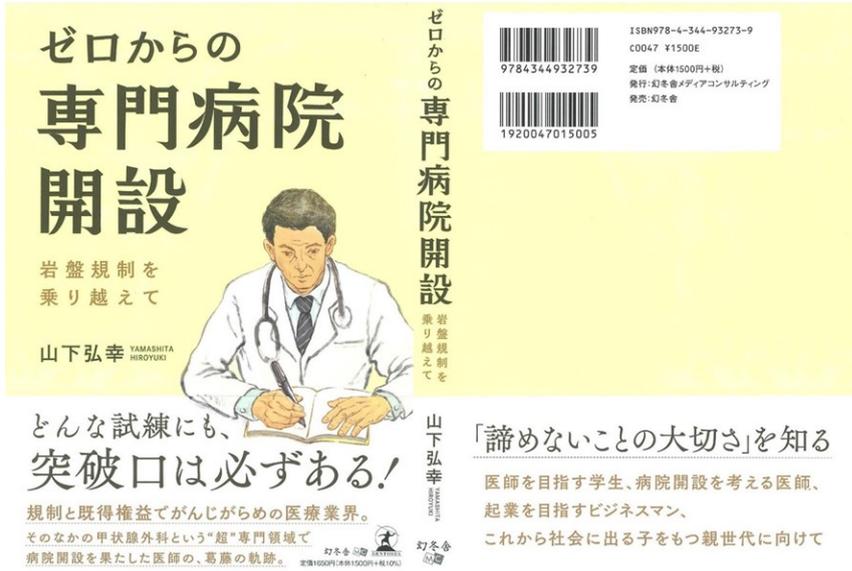
お恥ずかしい話も多いのですが、そういうことを隠すよりも思い切って書いた方が、その後の病院開設に向けた私の思いもより伝わるのではないかと考えました。なぜこんなことができたのだろうかと振り返ると、やはり私自身の生い立ちが背景にあると思ったからです。

読んでいただければ分かりますが、私、優等生ではないんです。一般的に優等生は敷かれたレールの上を走ることはできて先の見えない目的地にレールを敷こうとはしません。私は型から外れるような生き方をしてきたから無謀とも考えられるようなことができたのかも知れません。

それは医療以外にも通じることだと思っていて、起業を考える若者、子育てをする世代の方にも参考になる部分があればいいなと思っています。優等生になること、いわゆるよい子を育てることばかり考えなくてもいいのではないのでしょうか。

——**先生の人柄や絶対に諦めないという生き方が伝わってきます。ぜひインタビューをしたいと思いました。**

コロナ禍で少し時間ができたこともあり、いろんな事を考えて、自分の過去を振り返ることができてよかったです。破天荒な人生ですが、ドラマチックな出会いもあり、よい思い出です。



——出版後の反響はいかがですか。

やはり、私の過去が想像以上に破天荒だったと驚く方が多いです。

医師仲間からは病院を開設するのにそんなに苦労したのかと言われます。専門病院だったからあっさり許可してもらえたのだろうと思っていた方が多いようです。なかなか想像もできないですね。病院を開設しようなんてそもそも考える人がいませんから。

私は普段はさっぱりしたところもあるけど、小さい頃から、何かを思い立ったらしつこく絶対に成し遂げたいと努力してきました。優等生ではないからこそ歩いて来られた道のりだと思います。医療関係者以外にも、多くの方が読んでくれると嬉しいです。

山下弘幸（やました・ひろゆき）氏

徳島大学医学部卒業後、九州大学第一外科講座に入局。米国留学、野口病院での勤務などを経て、2006年、やましたクリニックを開業。2012年、19床の有床診療所とする。2017年、やました甲状腺病院を開設。

シリーズ [著者インタビュー](#) »

記事検索

ニュース・医療維新を検索

